

献呈のことば

漸く淑氣黄鳥を催し晴光緑蘋に転ずる頃、楠元先生の本学へのご貢献に対して、我々鹿児島大学法文学部法学科の教官一同が、先生の退官記念の論文集を心をこめてお贈りできることになったのは、まことに慶びに堪えない次第である。

楠元先生は、一九八二年に本学に行政法の教授としてご赴任になった。その当時の学長は、本法学科の長老であった石神兼文先生であった。楠元先生は、石神先生の東京大学での後輩である。このような関係もあり、しばしば、新任教官と石神学長との仲介の労をとられ席を設けてくださった。楠元先生は、鹿児島大学の教官としてはあまり永いご在任ではなかったが、その間、重要な役職を次々に歴任され、本法学科に貴重な足跡を残された。一九八三年から一九八五年まで本学評議員、一九八五年から一九八七年まで法科学科科主任、一九八七年から一九八八年まで大学院法学研究科研究科長を務められた。

研究面では、先生は、特にオンブズマンの研究で業績を積まれた。これは、単に研究室での研究に留まらず、鹿児島県の行政にも強い影響を与えられた。それ以外でも、先生は、県の人事委員会委員をはじめとして、地方公共団体にも、かずかずの貢献をされて今日に至っている。

先生のご在任中、先生独特の飄々として且つ温和なご性格は、学科の安定に寄与するものがあつた言えよう。そして、更に、いろいろな会合での飲み合いの席では、座を盛り上げようと絶えず気を使っただけでいらっしやるのが察知できた。先生は、あまり沢山の酒をお飲みになることはなかったが、退官前年の年末頃にはじめて足がひよろつくまでお飲みになったことがある。そして、私に、やっと気持ち楽になってきたとおっしゃったことがある。今でも強く印象に残っている。それから暫くして先生は不慮の事故に会われて静養されることになるが、先生の強い意思は回復を促進する原動力

となった。それというのも、先生は、海軍兵学校出身の航空士官としての強靱な戦闘力の持ち主だからである。この治療にあたって十全の配慮をしてくださった井形昭弘鹿大現学長は、楠元先生の海軍兵学校での後輩であり、且つ、学部は違っても東京大学での後輩でもある。そして、私事にわたって恐縮ではあるが、楠元先生は、私の兄の海軍兵学校時代の同期生である。その私が楠元先生より一足先に病氣になった折り面倒を見て貰ったのがまたまた井形学長であった。なんとも人生の因縁というものは地下茎のように次々に繋がっているものとしみじみと思うのである。

先生のお人柄の暖かさの故に、先生ご在任中には、随分皆で我儘をいって先生を困らせたこともあったが、若い者の甘えとしてお許し戴き度い。先生には、まだ、研究者として、同時に、鹿児島県の指導者の一人として充分にご活躍願わなければならぬ。今後とも、健康に充分に配慮され、我々法学科教官の先達としてご指導をお願いして止まない。

一九九〇年二月吉日

法学科主任 菊 谷 達 彌